

附属小の教員としての「切磋琢磨」の場 授業研修の事後検討会を通して

校庭の木々も紅葉の季節を迎えました。朝や放課後の教室から合唱の会に向けて学級合唱に取り組んでいる歌声も響く季節になりました。

今月は18日から全附連の総会で宮崎市に出張したり、先週は東北附連で盛岡市への出張があったりと学校にいる時間がとても短く感じました。10月も先生方や子どもたちは大活躍で3年生は仙台市の音楽祭で「南風にのって」を発表しました。残念ながら私は聴くことができませんでしたが、吉川校長先生が子どもたちの合唱、そして末永先生の指揮を絶賛していました。25日には前田先生が市教研で社会科の授業を提案しました。前日遅くまで板書や掲示資料を作成するなど授業作りに掛ける前田先生の姿勢には本当に頭が下がる思いでした。そして何より、4年1組の子どもたちが育っていることを嬉しく思いました。また、4年生の佐竹先生には「表現運動」の学年の取り組みの様子を見せていただきました。

子どものためになることをどんどんやろう、ということはとても大切なことです。何より附属小で教育の理想を語れなくては、どこで理想の教育を語ることができるでしょうか。

先週行われた東北附連後には6人の研究主任が話したらず、この冬仙台で再集結することを決めたそうです。また、三井先生を中心に動き出した「算数サークル」は苦戦しながらも2回目を終え、めげずに3回目に向けて準備を進めるそうです。

校内でも11月の外国語強化指定事業の公開に向け、初めての試みで英語の授業研修会が行われました。検討会では積極的な意見の交流が行われ、久しぶりに身が引き締まるような気持ちで参加しました。

種々の研究授業後の授業検討会のあり方については昨年度も宮城県の総合教育センターで問題提起をしてきました。

どうも最近「ワークショップ型の話合い」が中心で、付箋に成果や課題を書いて模造紙にまとめる「型」が流行しています。たくさん色分けされた付箋紙が模造紙にきれいに並ぶのですが、授業の検討に深まりがないのです。私はその原因として、私たち教員が授業を批評する力（※言い換えると「授業での子どもの姿を見取る力」）が落ちてきていることにあるのではないかと考えています。「検討会をしても意見が出ないから検討会での意見交換を止めよう」という考えが私たち教員の「話す力」を知らず知らずのうちに落としてきているのではないかと、危惧しているからです。

このことは教育現場では決して許されることではありません。子どもたちにとって何が真実なのかを本音で言い合えることは職員集団の中で最も大切なことです。先日の検討会の最後にも話しましたが、私たちは話すことによって学ぶのです。多くの人前で挙手して話すことはそれなりに勇気があることです。しかし話すことによって自分の考えをまとめたり、批判したりすることを通して、論理的に考える力を身につけていくのです。

だからこそ附属小の切磋琢磨の場と言えば「全校授業の後の事後検討会」と語り継がれてきたのです。

研究同人として、子どもの姿で勝負する私たちの研究の原点がここにあるのではないのでしょうか。このような日々の積み重ねが研究紀要になり、そして同人誌の「もくせい」につながり、私たちの日々の研鑽の記録として子どもたちとの貴重な実践の記録として受け継がれてきたのではないのでしょうか。

11月2日、高学年の授業研修会。残念ながら参加できませんが、よりよい子どもの姿を求めてさらに活発な話し合いが行われるものと期待しています。

(副校長 手代木)